

## 霊長類のコミュニケーションの進化とその研究アプローチ

香田 啓貴（京都大学）

人間言語の起源とその生物進化について研究するにあたり、ヒトと最も近縁な動物であるヒト以外の霊長類と比較する方法は古くから採用されてきた。本ワークショップでは、ヒト以外の霊長類を対象とした音声と聴覚を利用したコミュニケーションの研究についてとりあげ、ヒトの音声言語によるコミュニケーションとの相同性や相違性を考察する行動生物学的なアプローチについて紹介する。

言語は主に音声を介したコミュニケーションとして用いられるが、ヒト以外の霊長類においても個体間のコミュニケーションには音声が用いられる。ヒトの音声言語とサルや類人猿の音声コミュニケーションの根本的な違いは、音声産出と聴覚情報処理のメカニズムの違いにあると考えられている。

ヒトの音声は高い可塑性、すなわち様々な音を後天的に学習し発声する能力に支えられている。一方、ヒト以外の霊長類ではヒトで見られるような発声の可塑性は認められない。こうした違いは、発声器官に関する形態学や神経解剖学的な証拠によって裏付けられている。また聴覚情報処理についても、言語は音列から意味を抽出し外的な事象に参照する心的な処理に支えられているといえる。しかし、ヒト以外の霊長類では、音情報と視覚情報を一致させるような心理実験課題を解くことができず、意味を処理する際のメカニズムにヒトと違いがあると考えられている。

こうした行動生物学が明らかにしてきた事実から、どのような生物学的なメカニズムが明らかになってきたのか（あるいは予測されているのか）を整理し、生物学哲学や生物言語学で扱われている「メカニズム」と、どの程度整合性が語れるのかを検討する。さらに、生物言語学からのフィードバックを考慮して、行動生物学で取り組むべき課題について議論したい。